4章 水害と治水事業の沿革

4-1　既往洪水の概要

山国川での近年の大規模な洪水は、平成5年9月等、そのほとんどが台風期に発生しているが、稀に昭和28年6月等の梅雨による洪水も発生している。また、山国川は、急流河川のため、洪水の到達時間及び継続時間が短い。

明治以降の比較的大きな被害をもたらした著名な洪水の概要は以下のとおりである。

表 4-1　山国川流域の主な洪水

洪水年		出水概要	主な被害状況
1893	明治26年 10月13～15日 （台風2号）	大分県内における気象状況は、13日正午ごろから台風よる強風が始まり、その後気圧の下降が著しく、14日の夕刻には23.1mm/hの豪雨となり、14日の降水量は283.9mm、総降水量403.4mm、継続降雨時間75時間が記録された。堤防決壊等による浸水のため多くの死者、負傷者を出した。	死者27名、負傷者48名 浸水家屋5,100戸
1918	大正7年 7月12日 （台風5号）	11日午後10時20分頃から豪雨となって、しだいに風勢を増し、12日午前6時には最大風速の16.6m/s、最大瞬間風速の23.5m/sに達した。降雨は滝のように降り注ぎ、最大雨量は5分間7.0mm、1時間30.0mm、また日雨量は耶馬渓で350mm以上（大分測候所開設以来の降雨）を記録し、山国川を含む各河川において出水し氾濫した。	死者・行方不明者10名 床上浸水104戸、床下浸水298戸
1944	昭和19年 9月16～17日 （台風16号）	山国川は大氾濫を起こし、浸水家屋、倒潰家屋、橋梁流出など大きな被害が発生したが、第2次世界大戦末期のため被害の詳細は不明である。この洪水は、昭和23年から着手した山国川改修事業における計画高水流量決定の対象洪水となった	浸水家屋：約7,800戸 浸水面積：約1,600 ha
1953	昭和28年 6月25～29日 （梅雨前線）	梅雨前線の活動が著しく活発で、特に25日～29日までの5日間の降雨水量は、県の中部や西部では800mmを越えた。山国川では、中津市金谷の水位が6.20mに達した。（危険水位6.00m、警戒水位4.00m） 特に中流部で被害が出た。	死者・行方不明者1名 床上浸水605戸、床下浸水3,196戸
1993	平成5年 9月2～4日 （台風13号）	3日の16時前に薩摩半島に上陸した台風13号は、中型で強い勢力を保ちつつ北東に進み佐伯付近を通過し豊後水道に抜けた。県内では沿岸部を中心に風雨が強く、山国川流域の東谷では300mmを越える大雨を記録した。山国川では下唐原観測所において警戒水位を突破し水防警報が発せられた。上曽木、新原井では既往最高水位が更新された。	床上浸水99戸、床下浸水139戸 浸水面積：約27ha

※出典：大分県災害誌
※明治26年10月、大正7年7月の被害状況、下毛郡及び宇佐郡の被害合計値
※昭和19年9月の被害状況は戦時中で記録がないため、推算した値
※昭和28年6月の被害状況は、中津市、下毛郡、宇佐郡の被害合計値
※平成5年9月の被害状況は、中津市、下毛郡の被害合計値（「水害統計」から記載）。

(1) 明治 26 年 10 月洪水

■ 要　　因：台風 2 号

■ 降 雨 量：大分観測所 2 日雨量：403.4mm

■ 被　　害：下毛郡、宇佐郡において
死者 27 名、行方不明者 48 名
浸水家屋：5,100 戸

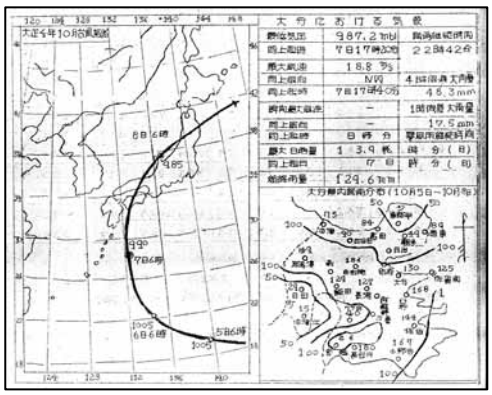
明治 26 年 10 月の台風における
山国川の洪水氾濫図
（出典：大分県災害誌 S27.9 大分測候所）

(2) 大正 7 年 7 月洪水

■ 要　　因：台風 5 号

■ 降 雨 量：中津観測所 2 日雨量:225.1mm
耶馬渓観測所 2 日雨量：429.7mm

■ 被　　害：下毛郡及び宇佐郡において
死者・行方不明者 10 名
床上浸水：104 戸、床下浸水 298 戸



大正 7 年台風第 5 号の雨量(mm)
（出典：大分県災害誌）

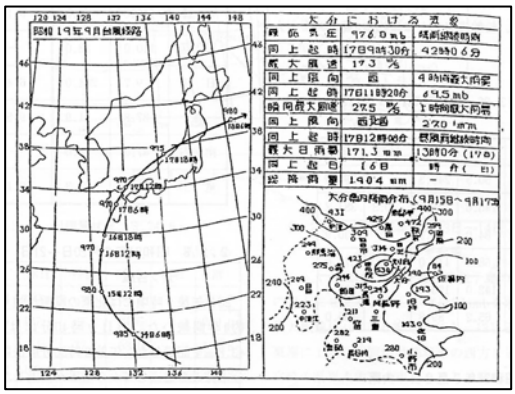
(3) 昭和 19 年 9 月洪水

■ 要　　因：台風 16 号

■ 降 雨 量：中津観測所 2 日雨量 420.0mm
耶馬渓観測所 2 日雨量 249.0mm

■ 被　　害：中津市、下毛郡、宇佐郡において
浸水：約 7,800 戸
浸水面積；約 1,600ha

出水状況写真(昭和 19 年 9 月)
（出典：大分県災害誌）



大分県における気象図(昭和 19 年 9 月)
（出典：大分県災害誌）

(4) 昭和 28 年 6 月洪水

■ 要　　因：梅雨前線

■ 降 雨 量：下唐原上流域平均 2 日雨量:309.2mm

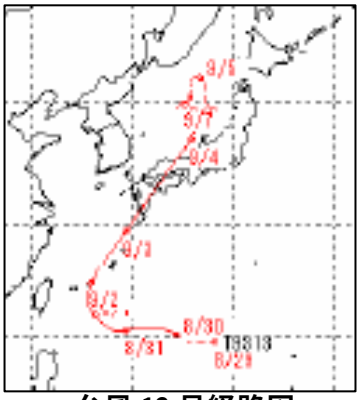
■ 被　　害：中津市、下毛郡、宇佐郡において
死者・行方不明者 1 名
床上浸水：605 戸、床下浸水 3,196 戸

(8) 平成 5 年 9 月

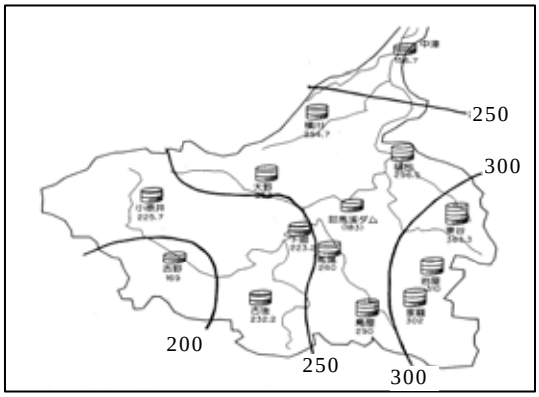
■ 要　　因：台風 13 号

■ 降 雨 量：下唐原上流域平均 2 日雨量:255.0mm

■ 被　　害：中津市、下毛郡において
床上浸水 99 戸、床下浸水 139 戸
浸水面積：約 27ha



台風 13 号経路図
(出典：気象庁 HP)



H5.9 洪水等雨量線図（総雨量）

耶馬渓ダムの流木の状況
(平成 5 年台風 13 号)

4-2 治水事業の沿革

(1) 平安時代末期の山国川

古い時代の山国川は、数度にわたりその流路を変え、また、数条に分派して流下していたが、平安時代末期においては、現状の河口部に近い付近を流れている。この時代の山国川は御木川と呼ばれていたようで、年々流下してくる砂礫は、河口に砂丘及び砂州をつくり洪水の疎通を阻害し、このため流水の一部は宮永から大塚山の西方を流れ、蛎瀬を過ぎて周防灘（すおうなだ）に注いでおり、この流れを大塚川と呼んでいる。

この頃はまだ、中津の町並みは形成されておらず、中津川原としての川の中の砂州に過ぎなかったが、それでも渡し舟が置かれ、橋もつくられて、両岸との連絡はうまく保たれていた。小祝島は、まだ存在していない。

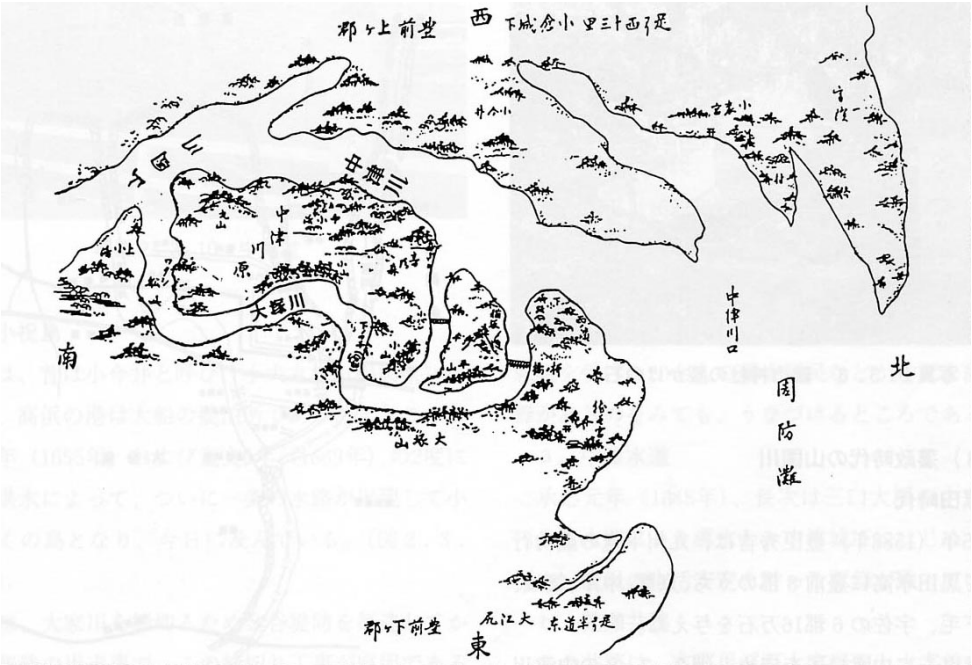


図 4-1　平安時代末の中津　　(出典：中津市史)

(2) 藩政時代の治水事業

慶長 5 年(1660 年)細川忠興が中津城 7 万石に隠居すると、城郭の狭隘さに、その規模拡大と当時の山国川の本流である大家川を塞ぐこととした。この事業は、当時では大変な大工事で延長約 1km に及ぶ金谷堤防の築造により川の流れを東から西に移し、それまでの支流中津川を本流とした。

現在の小祝島は、当時は小犬丸村(福岡県)に接続していたが、明暦元年及び寛文 9 年の 2 度にわたる洪水により、一条の水路が出現し完全な島となり、山国川は小祝島を挟んで島の東側と西側に分かれて海に注ぐことになった。これは金谷堤防築造から約 50 年後の出来事で、大家川の締め切り工事が原因と考えられる。

この時代においては、その後は特に目立った治水事業はないが、堤防の築造などの事業は要所で行われた。

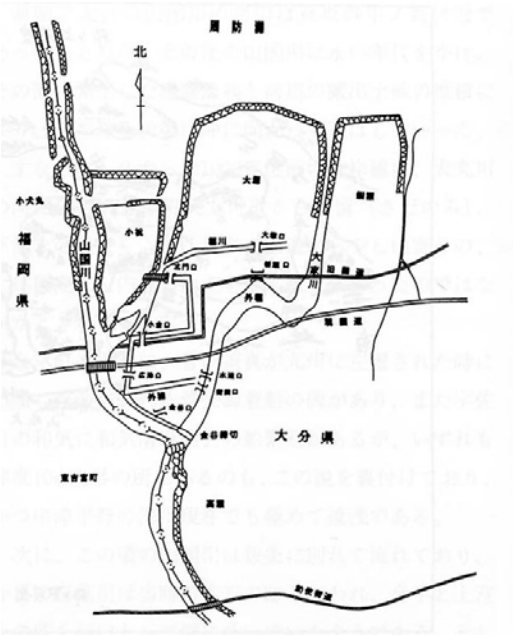


図 4-2　細川時代の中津城
(出典：中津市史)

写真 4-1　現在の中津城

(3) 近年の治水事業

近年においては、昭和 10 年に大分県と福岡県によって災害復旧や維持補修などが実施されたが、その記録はほとんど残っていない。

本格的な改修工事は、山国川流域に大水害をもたらした昭和 19 年 9 月の洪水にかんがみ、昭和 23 年から直轄事業として下唐原(しもとうばる)地点における計画高水流量を 3,100m^3/s とし、河口から旧大平村(たいへいむら)の区間並びに中津川(なかつがわ)及び黒川(くろかわ)の主要な区間に築堤、護岸等を施工した。

昭和 41 年には一級河川の指定に伴い、従来の計画を踏襲する「工事実施基本計画」を策定した。

(4) 改定計画

昭和 43 年には、流域の開発、各種水文資料の充実などから、基準地点下唐原における基本高水のピーク流量を 4,800m³/s とし、このうち 500m³/s を上流ダムで調節して、河道への配分流量を 4,300m³/s とする計画に改定した。

この計画に基づいて、昭和 60 年に上流山移川に耶馬渓ダムが、平成 2 年に平成大堰が完成している。

また、昭和 63 年には、山国川の直轄管理区間を山移川合流点まで（15.3km～27.3km）の約 12km を延伸した。

近年では、旧大平村唐原地区の築堤、旧本耶馬渓町樋田地区の築堤、河口部左岸吉富町の高潮堤防の整備等を実施してきた。

表 4-2　山国川における治水事業の沿革

西　暦	年　号	計画の変遷	主の事業内容
1948 年	昭和 23 年	直轄改修事業に着手	・計画高水流量：3,100m³/s (基準地点下唐原)
1966 年	昭和 41 年	新河川法の施行 工事実施基本計画	・従来の計画踏襲
1968 年	昭和 43 年	工事実施基本計画の改定	・基本高水のピーク流量：4,800m³/s ・河道への配分流量　　：4,300m³/s (基準地点下唐原) ・耶馬渓ダムで 500m³/s 調節
1985 年	昭和 60 年		・耶馬渓ダム完成
1988 年	昭和 63 年	直轄区間の延伸	・15.3km～27.3km の約 12km を延伸
1990 年	平成 2 年		・平成大堰完成

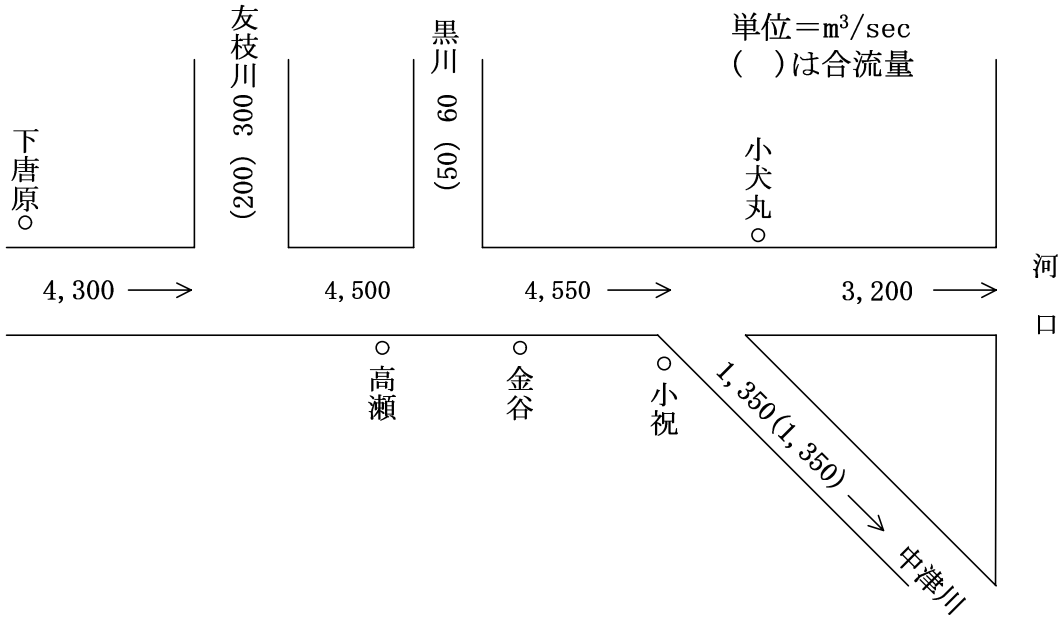


図 4-3　　山国川水系工事実施基本計画流量配分図（昭和 43 年）